

韓国の男性運動とそれを取り巻く環境について

佐々木, 正徳

九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻 : 博士課程3年

<https://doi.org/10.15017/7374721>

出版情報 : 国際教育文化研究. 4, pp.107-118, 2004-06-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



韓国の男性運動とそれを取り巻く環境について

佐々木正徳

本論の目的

筆者は昨年度の国際教育文化研究 (vol.3) に、「韓国男性運動の展開」というタイトルの小稿を掲載した。本稿はその続編的な位置づけにある。昨年の論稿では、1990年代以降韓国において生じてきた男性運動および男性学について、まずそれらの展開過程を概括した上で、韓国の男性運動が父親運動に特化しているという諸外国の男性運動の展開とは様相を異にする傾向を指摘し、その理由を検討することが男性性研究への貢献と韓国文化/社会論への貢献に寄与するであろうと述べた。そして結論部では、今後の韓国の男性運動と男性学の方向性と可能性について検討している。そこでは、父親運動と現代韓国の社会規範との相関性、親フェミニズム的な視点で展開してきた韓国の男性学とフェミニズムの協調可能性、男性運動と男性学とのより堅密な連携の必要性和可能性が述べられ、解決していくべき問題として男性側からのバックラッシュとセクシュアリティの面で周縁化されている人々を可視化することを指摘した。総じて、昨年の論文は具体的な事例の検討や何らかの事象の明示化を試みたというよりは、韓国の男性運動の特徴と問題点を指摘することに留まるものであった。

そこで本論では、昨年の議論をより発展させるために、筆者が2003年9月から行っている韓国のある男性運動団体でのフィールドワークから得られた知見を紹介し、これからの韓国の男性運動の方向性について展望を行うことにする。

佐々木〔2003〕〔2004〕で述べたように、韓国の男性運動はよい父親になろうとすることを目的とする父親運動が中心である。つまり現時点で男性の性役割の構築性や多様性についてはあまり意識されていないといえる。これは男性運動が生起している諸外国と比べてみても特徴的である。例えば、隣国日本の場合と比べてみよう。日本でも韓国とほぼ同時期に男性運動が生じている。日本においては1991年に発足した「メンズリブ研究会」が男性運動の端緒である。ついで1995年には大阪にメンズセンターが設立され、男性問題・ジェンダー問題に関する情報発信を行っている。また、1996年からは年に一回「男のフェスティバル」が開催されており、主にジェンダー問題に対する男性の意識啓蒙の役割を果たしている。日本の男性運動の場合は「メンズリブ」¹という言葉に象徴されるように、古い「男らしさ」意識からの脱却と男性の「自

立」の必要性が問題とされることが多い²。それは男性の問題を扱った著作に、著者の実体験や成人男性が現実と直面している「男性としての」アイデンティティ不安をどう解消あるいは乗り越えていくかということをテーマとしているものが多い³ことから伺うことができる。日本のメンズリブの枠組みでは、男性は父親である（になる）ことは前提とされず、むしろそうした自明性に疑義を示すことが一つの目的にもなっているのである。こうした傾向は、男性運動が性と性役割の構築性を語る昨今のジェンダー研究の影響を受けて展開しているとするならむしろ当然の傾向である。

以上のような観点で捉えるならば、韓国で生じている父親運動は保守的な男性運動の可能性がある。男性学が基本的に親フェミニズム的な観点に立ってなされるためにあまり目立たないが、男性運動にはフェミニズムに親和的な運動とそれに対立する保守的な運動がある。保守的な運動の代表例としてはアメリカ合衆国のプロミスカーパーズの例が指摘できよう⁴。仮に韓国の男性運動が保守的なものであれば、男性の父親役割を前提とする運動を展開させることも十分に理解できる。しかし、2 節で触れるように筆者が参与観察を行っている父親運動団体は、活動目標の一つとして男女平等社会の実現を志向しており、それは設立宣言文にも明記されている。つまり、韓国の男性運動は親フェミニズム的な父親運動という点で特異性を有しているのである。

ところで男性運動を分析することは、その地域の男性性⁵を明らかにする上で非常に有効である。なぜなら男性運動は、その運動が生起した社会の男性性が何らかの危機に瀕したり、変動の局面に晒されたりした時に、それに対応するものとして生じると考えられるからである。当該地域の男性運動がどういった経緯で生じ、何を目的とし、どのように展開しているのか、そして今後どういった方向に向かっていきそうであるかを検討することは、当該地域の男性性において、何がこれまで重要視されていて、何が変化の波に晒され、何が引き続き維持され、そして何が新たに男性性の要素として加えられようとしているのかを知る上で、有効な知見を提供するであろう。特に韓国の場合、男性運動が保守的志向性をもたない父親運動が主流であるという特徴を有している。韓国の男性運動で何ゆえ父親運動が主流となってきたのかを検討することは韓国の男性性を巡る諸問題の特徴を抽出する上で有効な方策になりえよう。そして、韓国の男性性を抽出することは、男性性研究の世界的な動向にも貢献する面が大きい⁶。また、先程簡単に触れたように、韓国と日本の男性運動は発生した時期がほぼ同じであるにもかかわらず、その後の展開過程は大きく異なる。こうした差異が生じた原因に視線を向けることで、日韓比較への視座が開け、両国の男性運動の一層の発展に寄与することができるかもしれない。更に、韓国の男性性に注目することは、日本においてこれまでにないほどの規模で人々の興味を集めている韓国社会を扱った、韓国文化論としての側面も有するものである。

以上のような立場に立って、本論では以下の構成をとって論を進める。まず1 節では、韓国の男性運動の成立背景とこれまでの展開を振り返る。これは昨年度の本紀要に掲載した論文を要約したものに、その後の知見を若干付け加えて再構成したものである⁷。続く第2 節では、筆者がフィールドワークを行っている男性運動団体の沿革や活動を紹介しながら、韓国の男性運動の現状を紹介することにする。男性運動の発生からおよそ10 年が経過した現在、韓国の男性

運動は一つの岐路に立っているようである。現在の韓国の男性運動を取り巻く環境とそれに対する男性運動団体の取り組みをフィールドワークを通して得られたデータを基に暫定的に示すことを試みる。そして、最後の結論で韓国の男性運動の今後の方向性について検討することにする。

1. 男性運動の展開

韓国の男性運動は 1990 年代以降徐々にその裾野を広げつつある⁸。それ以前にも「メタマン (Meta Man) 運動」や韓国版「プロミスキーパーズ (Promise-Keepers) 運動」など男性運動と呼べるものがいくつか存在していたが、これらはいずれも男性運動というよりは特定の宗教の信仰に基づいたものであった。90 年代以降、韓国の男性運動の主流となっていく良い父親になることを目標とした一連の活動は、1991 年に行われた「富川 YMCA 父親教室」および同年ソウルで行われた「絵本製作ワークショップ」「子どもとの汽車旅行」にその端緒を求めることができる。このうち、「絵本製作ワークショップ」を機にして結成された「良い父親になろうとする人たちの集まり」が、その後の一連の男性運動の契機となった。そこで、この「絵本製作ワークショップ」について少し詳しく紹介しておこう。

「絵本製作ワークショップ」は 1991 年の 5 月 1 日、自身の子どもを主人公にした絵本を作るために、12 名の若い父親が集まったことから始まった。ワークショップは 5 ヶ月に渡って行われ、10 巻の絵本を編み出し、同年の 10 月初旬にソウルのオリンピック公園で絵本の原画展示会が行われた。一連のワークショップは多くの人々の興味関心を惹起し、マスコミによる取材も行われた。「専門家でない多様な職業のとても『平凡な若いパパたち』が本を作るという理由だけでも、言論の注目を受けるのに十分だった」⁹のである。そして同年 11 月、絵本作りに参与した 10 名の男性が再び集まり、現代社会で父親の地位と役割が失墜していることを認め、こうした問題を少しでも解決していくための組織の発足を決意した。それが「良い父親になろうとする人たちの集まり」である。同会は翌年の 5 月 1 日に、父親であるということだけをメンバーに必須の共通点とした、時代に適合した望ましい父親像を生活実践を通して追求していく集まりとして結成された。この集まりは韓国社会に男性問題が存在することを明らかにし、いくつかの父親運動団体結成の契機となっただけでなく、父親運動以外の団体の結成や男性問題に対するいくつかの対策がとられる契機にもなった。例えば、1995 年、著名人を中心に「平等文化を育てる男性の集まり」が結成される。この活動は一旦自然消滅するが、1997 年には今度は一般人を中心として新たに発足されることになる。同じく 95 年には男性専用の相談電話「男性の電話」が開設される。「男性の電話」は開設当初からその需要を失うことなく認知度を広めていき、1999 年にはインターネットによる相談が開始されるに至る。1997 年 5 月 1 日には全国各地に存在していた父親運動団体を一つの全国運動団体としてまとめる「韓国父親クラブ全国機構」(以下「父親クラブ」) の設立総会が催された。「父親クラブ」は父親の子育てを考えるための全国運動団体として、韓国全土から 30 の男性グループが集まって設立されたものである。

設立総会当日は、設立セレモニーの他、フェスティバル、父親研究グループによるシンポジウムが開催され、韓国の父親たちの現状や問題点、韓国の男性運動の現状などについての報告が行われた¹⁰。マスメディアが総会の様子を全国に報道することで、父親運動の社会への認知度が高まる効果をもたらした。本総会の5ヵ月後、1997年10月には「NGO 父親財団」も結成された。「父親クラブ」は、全国に散らばっていた父親運動に関するグループを一つの団体として統合したという点で韓国の父親運動の土台を築いたといえる。韓国の男性運動は父親運動として、この時期急激にその知名度を高めたのである。

ところで、以上の展開からわかるように、韓国の男性運動はもともと家庭における父親の權威の失墜への対策、換言するなら家庭内における父親の地位と役割の回復（あるいは獲得）を目的として誕生したものである。その意味で、活動の初期段階において男性運動＝父親運動という側面があったことは当然である。そして、そのための具体的な方法として「家庭内で育児に参加すること」ということが重視されていたと見ることができる。なぜなら「良い父親になろうとする人たちの集まり」結成の契機が如実に示しているように、家庭内における地位と役割の回復のために推奨されたことは育児への積極的な参加であったし、また、父親であるということをメンバーの共通点とするということは、子どものいない男性はそこから除外されるということである。ここから、結成当時の男性運動は父親運動であったが故に、活動の幅が限定されていたとすることができる。

韓国の男性運動はこの時期が最初のピークであったと言えそうである。この後、父親運動は一旦下火になる。「父親クラブ」は近年全国規模の集会を行っていないし、「父親クラブ」の設立以後は特別注目に値するような男性運動団体の設立や運動は生じていない¹¹。そうした状況の中、世紀が変わった2001年に結成されたのが筆者がフィールドワークを行っている「父親の集まり」¹²である。次節で詳しく検討するが、同会は今後の韓国の男性運動の中心的役割を担っていく可能性を持っている。男性運動の誕生から10年を経て、韓国の男性運動にはどういった変化が生じてきているのであろうか。同団体の活動の例を用いて検討してみることにする。

2. 男性運動の現在～ある父親運動団体の事例から～

本節では韓国の男性運動団体の一つである「父親の集まり」の沿革と活動内容を紹介することで、現在の韓国の男性運動を取り巻く環境と、今後の方向性について検討する。結論から先に言うと、「父親の集まり」は今後ジェンダーによる不平等の問題を解決するために、何らかの形で女性運動団体と連携をしながら、社会に対して積極的に働きかけていくことを志向しているようである。

a. 団体の沿革

「父親の集まり」は2001年6月に行われた発足記者会見をもってその歴史を刻み始めた。そこで表明された宣言は次の通りである。

われわれ父親たちは今まで平等で民主的な家庭を率いる父親としての役割を果たしてこなかったことを反省して…（中略）…新しい父親として生まれ変わることを宣言する。

- ・ 家庭生活に愛情と時間を投資して、育児と家事などの役割と責任を負担する平等で開かれた父親になるように努力する
- ・ 娘、息子を差別せず、同等の責任と役割を学んでいくように育てる
- ・ 自身の子どもだけを愛する偏向した父親ではなく社会の父親としてわれわれの娘と息子のために役割と責任を果たすことを宣言する
- ・ 家庭で子どもたちとともに過ごすことができる時間を持つことができるように、企業と社会制度改善運動をともにしていくことを約束する
- ・ 娘たちがみずからの主人として立つことができるように男女差別と男児選好思想を温存させる戸主制を廃止することの先頭に立つ

以上のことから、同会は「家庭生活を重視する」「子どもを娘・息子の区別なく平等に育てる」といった理念的な目標を掲げるとともに、それを実現させる一つの具体的な目標として「戸主制の廃止」を挙げていることがわかる。調査の時点では、戸主制の廃止¹³に関して何らかの具体的な活動は行っていなかったが、積極的に集まりに参加している会員間では戸主制の廃止を目指すという点については合意形成がなされており、今後積極的な行動を行っていく可能性がある¹⁴。戸主制の廃止は韓国の父親運動の契機となった「良い父親になろうとする人たちの集まり」においては目標として掲げられていない。また、同会は目標の一つとして「家庭と隣家の安全を守る父親」というのを掲げてはいるが、目標の実現のために提案されている活動を見ると、自身の家族内か、せいぜい父母の両親までを含めた範囲内で行われる程度の活動しかなかった¹⁵。また、同会が「隣家」という表現を使っているのに対して、「父親の集まり」の宣言文では「社会」という表現が使われていることから判断できるように、「父親の集まり」は「良い父親になろうとする人たちの集まり」よりも広がりをもった団体であるといえる。つまり、「父親の集まり」は「良い父親になろうとする人たちの集まり」の限界を加味した上で、より積極的に社会問題に参加していく方向性をもって発足した団体として捉えることができよう。b.で詳しく述べるように、戸主制廃止論議とは別に「父親の集まり」は、ジェンダーに関する問題について積極的な啓蒙運動も行っている。こうした点から本会はこれまでの男性（父親）運動団体とは若干異なる志向性をもった団体であると見ることができる。

同会の現在の会員数はおよそ 600 名程度である。会員は全国に存在しているが、月例会に定期的に参加するのはソウル市内あるいは近郊の会員に限られる。また会員の職業構成も大学教授から会社員まで多彩である¹⁶。役員は共同代表が 2 名、総務が 2 名、運営委員が 7 名から成り立っている。

では、続いて同団体の活動状況についてみてみることにしよう。

b.活動内容

同会の主たる活動には、月一回行われる月例会、web サイトによる情報交換、キャンペーン・フェスティバルの年間行事がある。月例会は毎月内容が異なり、男性問題についての勉強会が行われることもあれば、その月に行われるイベントの打ち合わせや準備に使われることもある。月例会への参加者は多いときでも 10 人程度であり、またその顔ぶれもほとんど毎回同じである。会終了後にはほぼ毎回食事会が催される。場合によってはその後 2 次会が行われることもあるが、遅くとも 11 時を前後して散会する。また、月例会はマスメディア（新聞・雑誌）からの取材を受けることが多い。web サイトには、「自由掲示板」「資料室」「写真掲示板」などがあり、子どもを養育する父親としての苦勞、家族内の役割などに対する苦勞、あるいは社会問題への自身の考えなどが語られている。「資料室」にはジェンダー問題に関するマスメディアの報道などが紹介されているので資料的価値も高い。

年間行事には、「家族遠足」や「全国父親フェスティバル」¹⁷がある。いずれも、会員のみならず会員とその家族が一緒になって参加するものである。「全国父親フェスティバル」は、2002 年から「父親の集まり」が主催となって年に一回行われている行事で、子育てや夫婦円満に関する勉強会と、子どもとともに行う体験実習などが実施される。参考として、筆者が参加した 2002 年の例を紹介しておこう。午後 1 時から始まった同行事は、前半に両親を対象とした家庭問題や夫婦問題についての講演会が行われ、後半に親子で共同作業を行う体験実習教室が行われた。講演の内容は「家族間のコミュニケーションに関して」「童話読み聞かせの意義ならびに体験」「夫婦特講」「子女性教育に関して」の四つである。これらはいずれもが家庭（家族）問題の範疇に含まれることであり、その意味で広くジェンダー問題を扱っているというよりは、円満な家庭を築き維持していくために必要な父親と母親の理想的な役割の学習という実践的な立場にたったものであるといえる。つまり、参加者が男性の場合には良い父親としての、女性であれば良い母親としての役割遂行を担うことの必要性が語られる勉強会であるということである。また、後半は親子の交流の時間となった。この年には陶磁器づくりとクッキーづくりが行われた。参加家族はどちらか一方を選択して、両親と子どもが協力しながら体験実習がなされていった。総じて、「娘を愛する父親の集まり」が行う年間行事は幸せな家庭を築くことの一助となることを志向して行われているようである。

他にも 2003 年には、男性から女性や弱者に対してなされる暴力の廃止運動を世界的規模で行っている団体から講師を招いたキャンペーンが、およそ一週間にわたって行われた。これはこの年に初めて行われた行事であり、今後も引き続き行われていくのかどうかは不明である。ただ、こうしたイベント開催の中心的役割を果たしているという意味で、「父親の集まり」の活動は男性問題・ジェンダー問題を積極的に社会に表明していこうとしている態度を有しているとみることができる。

続いて、筆者がこれまで行った参与観察によって得られた最近の会の様子・雰囲気、話し合いの内容について紹介することにする。筆者は 2003 年 9 月の月例会から現在も引き続き「父親の集まり」で参与観察を行っている。観察の場は、月一回開かれる月例会とその後の食事会・飲み会と、キャンペーン・フェスティバルなど各種行事である。筆者は主に月例会においては、

話の内容を聞き取ることに重点を置き、その後の食事会ではインフォーマルなインタビューを試みるという方式で調査を行った。また、フォーマルなインタビューも数人に対して行っている。内容は主に、会への参加のきっかけと動機、「父親の集まり」に対する印象、韓国の「男性性」のイメージについてである。

c.最近の様子～議題、問題点、方向性についての試論～

「父親の集まり」は韓国の父親運動の盛り上がりが一段落した後に設立された団体である。しかし、同会は「全国父親集会」を主催しいくつかのキャンペーンを企画・実行することでジェンダーに関する問題を広く世間に広めていく活動を行っており、徐々に韓国の男性運動の中心を担う団体になりつつあるようである。また、活動の拠点がソウルであるということも関係していようが、事あるごとにマスコミの取材が訪れるということは類似の団体がほとんど存在しないということを間接的に示しているともいえる。

先の「b.現在の活動状況」で見たように、「父親の集まり」は月例会の他に年間行事から成り立っている。月例会では多様な活動が行われるが、年間行事は会員の家族内の親睦を深めることを最大の目的としており、副次的効果として会員家族同士の親睦が深まることも期待して行われている行事である。家族内の親睦の深化という意味で、こうした一連の行事はこれまでの父親運動団体が目標実現のために行ってきた行事と同様のものである。ただ、「父親の集まり」の場合には、設立宣言文において「社会の父親であること」が特に主張されているため、これまでの父親運動団体よりも、会員間の家族ぐるみでの親睦が深まるといったことは十分に考えられる。

さて、そういった位置づけにある「父親の集まり」であるが、筆者の目を通して見ると、昨年のあり方と今年のあり方では大きな違いが生じている印象がある。2004年の年明け以降、会員間で今後の会の運営方針について話し合われる機会が増えている¹⁸が、そこで常に話題になるのが女性団体との連携と戸主制問題に関するものである。これは、父親運動団体の流れを受けて誕生した「父親の集まり」が、活動の目的や指向性の面で新たな側面を見せ始めたことに起因するものである。

上記の問題は、昨年の国会で戸主制の存廃が論議され、最終的に廃止が見送られたことが直接的ではないにしても関係している可能性が高い。筆者がフィールドに入ってからしばらくの間、月例会やその後の食事会の場において戸主制の存廃や国会での審議の状況について、会員間で意見交換がなされることはほとんどなかった¹⁹。しかし、廃止が見送られて以後の月例会からは、戸主制に対する会の立場表明の必要性という問題が、会の今後の運営方針の検討という枠組みの中でしきりに語られるようになった。こうなるに至った経緯を端的に表すある会員の発言を以下に紹介しよう。この会員は、翌年度の会の勉強会の内容の希望を問われた際に、戸主制存廃問題について賛成派・反対派双方の論旨を理解することの必要性を訴えて、勉強会の開催を提案していた。

『戸主制廃止』を会の目標としていながらも、それに関する話し合いや勉強会を行ってい

ないせいで、われわれは戸主制の何が本当に問題とされているのかがよくわかっていない部分が多い。そのため廃止へ向けてどういった行動をとっていくべきかなどの見解が共有されてもいない。」

これは、前年までの「父親の集まり」の活動を象徴する発言であるといえる。つまり、「父親の集まり」は、設立の当初、つまり 2001 年の段階から戸主制の廃止を明確に表明していたにもかかわらず、それに関する具体的な行動をこれまで行ってきていなかったのである。戸主制廃止の見送りという現実を前にして、ようやく何らかの活動の必要性が会員間に認識されたと言うことが出来そうである。その証拠に 5 月の月例会では戸主制に関する勉強会が行われ、引き続き 6 月にも行われる予定となっている。

そして、ジェンダー問題について活動を行っている他の（女性）団体との協調の必要性が話し合われるようになってきたのも、戸主制に関する論議が盛んになってきた時期と軌を一にしている。これも、これまで同団体の会員が男女平等に関する社会運動にあまり積極的にコミットしてこなかったことと関係があるろう。すなわち、いざ実際に社会に向かって何かを発信していこうとしても、経験がないためにどうしたらよいかわからないために、経験豊かな他団体との接触を必要としているということである。また、「父親の集まり」が単独で何か大きな行動をするには会の運営に多くの時間を割くことのできる人間が多くはないという問題もある。一方で、先程例に挙げたように「父親の集まり」は、2003 年に DV に代表される男性から女性や弱者に振舞われる暴力の廃止を訴えるキャンペーンをおよそ一週間に渡って各所で行っている²⁰。これは戸主制とは直接の関係はないものの、「父親の集まり」が男性問題・ジェンダー問題の解決を今後積極的に世に訴えていく立場にあるということを示唆させる事例であると言えることができるであろう。

「父親の集まり」は現在二つの方向性を示しつつある。一つは自身の家族だけに限定されない「社会の」父親を目指すという方向性であり、もう一つはジェンダー問題の解決を世間に積極的に訴えていくという方向性である。前者については、マスコミからの取材の際に社会の父親になることを目指すという旨の発言が多くみられることから、現時点ではイベントなどで家族内の父親ということがより重視されている面があるものの、今後は少しずつ意識向上がなされていくであろうと思われる。一方後者は、これまではそれほど省みられることはなかったものの、戸主制廃止案の撤廃という結果を受けてにわかにその必要性和重要性が認識され始めたようである。従来の男性運動の限界を踏まえて設立された「父親の集まり」は活動の初期には、従来の男性運動と同様に社会的な拡がりをもたない父親運動の型に嵌りそうになった。しかし最近になって、社会運動団体としての側面を模索し始めたようである。

結論

韓国の男性運動は現在過度期を迎えているようである。1990 年代前半の男性運動草創期には、

ひたすら「良い父親」になることが期待された。しかし、それは家庭における父親不在という問題を解決するための方策として生じたものであった。この文脈における「良い」父親とは自身の家族にとって良い父親であることのみを問題としていた²¹。また、この運動の背景には家庭での父権「回復」という必ずしも男女の固定的な性役割を否定しない価値観の存在を指摘することもできる。ただし、一連の父親運動が、父親の家父長的・権威的イメージの解体という意味で一定の効果を果たしたことは事実であり、その点は成果として強調しておかねばならない。現在実際に子どもをもつ男性の中で、自身が家庭内で「良い父親」になることを嫌ったり否定したりする人はごく一部の特殊な存在を除いて皆無であろう。しかし一方で、そうした考えを持っていたとしても父親運動団体に加入することはほとんどないというのが現実である。よって「社会に対して」よい父親たろうとし、現実に関心を持って努力を傾けている人はそれほど多くはないであろうと推測される。男女平等社会の実現を目的とするなら、父親運動団体は今後こうした狭義の「良い父親」ではなく広義の「良い父親」たるべくどういった行動をとり得るかを検討する段階に達しているといえよう。

戸主制廃止案の見送りという現実、廃止賛成派を落胆させるものではあったことは確かであるが、代わりにより本格的に問題にコミットさせる契機になったということもできそうである。「父親の集まり」の会員についても同様のことが言える。同会は戸主制の廃止を明確な目標として掲げて設立された団体である。しかし、戸主制廃止案が見送られるまで、積極的な活動はなされてこなかった。これまでは勉強会をただけでよしとしたり、年数回行われるイベントにより比重を置いてきたのである。社会運動的な側面を積極的に押し出して活動したことが皆無である同会にとって、現在は暗中模索の段階である。今後は先駆者である女性団体などの協力を得ながら最終的にはある程度の影響力を持った団体として自立することができるように試行錯誤を繰り返していくものと思われる。幸いにして物珍しさから、「父親の集まり」はマスメディアからの取材を受けることが多い。今後はこうした機会を積極的に利用することで社会への認知度を広めていき、同団体を社会運動団体として発展させていくことが期待されよう。

¹ もちろんこの言葉は、フェミニズムの文脈の中で1960年代以降に用いられるようになった「ウーマンリブ」を受けて用いられるようになったものである。

² 男性問題について考える際によく言われる「男らしく」から「自分らしく」へといった標語はまさにそうした志向性をあらわす典型的な例と言えるだろう。

³ 研究書としては須永[1999]、多賀[2001]など、一般向けの著作としては小谷野[1999]、勢古[2000]などが、その典型といえよう。

⁴ プロミスカーパーズが影響力を拡大していく過程については、伊藤[2002]に詳しい。

⁵ ここでは男性性を、「ある文化/社会/地域で生活する男性に獲得することが期待されている要素（実際に獲得が可能かどうかは問わない）」と規定しておく。日常的には「男らしさ」という言葉でイメージされるものに近い。

⁶ 韓国の男性性を抽出することが、男性性とグローバリゼーションをテーマとした近年の男性性研究の動向に貢献することになるという点については、佐々木[2004]で触れている。また、同論文では男性運動の日韓差異の原因についても仮説を提示している。

⁷ 男性運動の発生因や男性学との関わりなど、より詳細な事情は昨年度の拙文を参照されたい。

- ⁸ 韓国語の文献だが、韓国の男性運動と男性学の潮流に関して詳細に論じたものに鄭[2000b]がある。
- ⁹ 鄭[2000b : 206]。翻訳は筆者による。
- ¹⁰ ちなみに、この日の設立総会には日本から伊藤公雄が参加し、シンポジウムで日本の男性問題について報告している。なお、設立総会に関する記述は、伊藤他[2002 : 232]に依拠した。
- ¹¹ ただし、男性学の分野ではこの時期に大学での授業開講などの成果が見られる。詳しくは鄭[2002b]、佐々木[2003]を参照。
- ¹² プライバシーに配慮して団体名には仮名を用いている。
- ¹³ 戸主制廃止の是非については、2003年に国会で論議されたが、結局廃止には至らなかった。
- ¹⁴ これについてはc.であらためて触れる。
- ¹⁵ 佐々木[2003 : 58]。
- ¹⁶ 会員の中には家事労働を主に担っている男性もいる。
- ¹⁷ これは先程述べた「韓国父親クラブ全国機構」と直接的なかかわりはない行事である。
- ¹⁸ これは、正確に言うと2003年末の月例会の際に、その年の活動の感想およびまとめと、来年以降の目標が話し合われたときから始まったものである。以来継続してこの問題が話し合われているところを見ると、月例会に参加する会員の多くが以前から会の運営方針に対して一家言あったのであろう。
- ¹⁹ これには、戸主制廃止が実現しそうだという雰囲気が社会に存在していたこととも関係があるかもしれない。
- ²⁰ ただし、この行事のセッティングは大学に職を持つ共同代表がその大部分を一人で担った。
- ²¹ もちろん、この動き自体は否定されるべきではない。ただ自身の家族の幸福のみを追求するあまり、他家族に対して排他的になる危険性があるということを指摘するものである。

<参考文献>

綾部恒雄編 2003 『文化人類学のフロンティア』、ミネルヴァ書房

* 曹廷文他 2000 『男性学と男性運動』、同門社

趙惠貞（春木育美訳） 2002（1988） 『韓国社会とジェンダー』、法政大学出版局

鄭菜基（千奉祚訳） 2000a 「韓国における『男性学』と『女性学』」『ジェンダー学を学ぶ人のために』（日本ジェンダー学会編）75-90 頁、世界思想社

* 鄭菜基 2000b 「男性運動に関する諸研究」『男性学と男性運動』（曹廷文他著）15-61 頁、同門社

* Franklin II, Clyde W.（鄭菜基訳） 1996（1988） 『男性学とは何か』、サムソン

コンネル, ロバート.W（森重雄他訳） 1993（1987） 『ジェンダーと権力 セクシュアリティの社会学』、三交社

Connell, Robert W., 1995, *MASCULINITIES*, Polity Press

. 2000, *The Men and The Boys*, University of California Press

江原由美子・山田昌弘 2003 『改訂新版 ジェンダーの社会学』、放送大学教育振興会

古田博司・小倉紀蔵編 2002 『韓国学のすべて』、新書館

ギルモア, デイヴィッド 1994（1990） 『「男らしさ」の人類学』、春秋社

井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編 1995 『日本のフェミニズム別冊男性学』、岩波書店

伊藤公雄 1996 『男性学入門』、作品社

2002 「現代アメリカ合衆国における男性運動——プロミス・キーパーズを中心に」

『社会運動と文化』（野宮大志郎編）、ミネルヴァ書房

*伊藤公雄（鄭菜基訳） 1997（1996） 『男性学入門』、教育科学社

伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子 2002 『女性学・男性学』、有斐閣アルマ

康熙奉 2000 『こんなに凄いのか！ 韓国の徴兵制』、スリーエーネットワーク

片山隆裕 1985 「ジェンダーの相対性」『比較教育文化研究施設紀要』第36号 21-40 頁

片山隆裕編 1999 『アジアの文化人類学』、ナカニシヤ出版

川村湊編 2002 『思想読本[6] 韓国』、作品社

小林孝行編 2000 『変貌する現代韓国社会』、世界思想社

小谷野敦 1999 『もてない男』、ちくま新書

日本ジェンダー学会編 2000 『ジェンダー学を学ぶ人のために』、世界思想社

仁科健一・舘野哲編 1995 『新韓国読本3 韓国新世代事情』、社会評論社

岡田浩樹 2001 『両班 変容する韓国社会の文化人類学的研究』、風響社

佐々木正徳 2003 「韓国男性運動の展開」『国際教育文化研究』Vol.3 53-64 頁

2004 「『韓国における男性性』研究の意義についての一考察」『九州教育学会研究
紀要』（通巻第32号）〔印刷中〕

勢古浩爾 2000 『こういう男になりたい』、ちくま新書

瀬地山角 1996 『東アジアの家父長制 ジェンダーの比較社会学』、勁草書房

嶋陸典彦・朝倉敏夫編 1998 『変貌する韓国社会』第一書房

*ソンミョンヒ他 2000 『フェミニスト、男性を語る』、青い思想

須長史生 1999 『ハゲを生きる』勁草書房

多賀太 2001 『男性のジェンダー形成 <男らしさ>の揺らぎのなかで』、東洋館出版社

Taga, Futoshi, 2004, "East Asian Masculinities," in M. Kimmel, J. Hearn and R. W. Connell (eds.),
Handbook of Studies on Men and Masculinities, Sage Publications, forthcoming.

天童睦子 2001 「ジェンダーとヘゲモニー支配」『文化伝達の社会学』（柴野昌山編）102-131
頁、世界思想社

渡辺恒夫編 1989 『男性学の挑戦 Yの悲劇？』、新曜社

*女性韓国社会研究会編 1997 『男性と韓国社会』、社会文化研究所

About Men's Movement and the Environment which Surrounds it in Korea

Masanori SASAKI

The establishment of "The Group of The People who Try to Become a Good Father" in 1992 generated a Korean men's movement. Then, by gathering the organization which existed in each place in 1997 as one national activity organization, "National Organization of Father's Club in Korea", it got tentative excellent results. The Korean men's movement is originally a measure to the eclipse of the authority of the father in the home, if paraphrasing, the one which was born to recover (or to get) the status and the role of the father in the home. Therefore, the men's movement in Korea was strong in the side, the father's movement, in the early stage step of the activity. As for the men's movement in those days, it is the most important to "participate in the child care in the home". However, as for this thing, the man where there is not a child at the same time meant the fact to be excluded from there. The men's movement in the early stages had the limit that the width of the activity was limited because it was a father's movement.

It enters in the 2000s and the Korean men's movement is showing a new tendency. The men's movement organization, "The group of the fathers" which was established in 2001, is taking the center. "The group of the fathers" released the following declaration when establishing.

- We make an effort for investing love and time in the home life and becoming the equally opened father who is burdened with the role and the responsibility of the child care and the housework and so on.
- We don't discriminate against our daughter son, and raise her and him to learn an equal responsibility and a role.
- We are not the deflected father who loves only its own child and declare that it achieves a role and a responsibility for our daughter and son as the social father.
- We promise to make a social movements of a company system improvement to be able to have the time which can be spent with the children in the home.
- We stand at the head of abolishing the householder system to make keep sexism and son's preference, because of daughter's independence as his own master.

"The group of the fathers" has two directionalities. One is not the father who is good only for the partner and the child, is the directionality to aim at the good father who was opened by the society. Another is the directionality to complain to the world of the solution of the gender problem actively. To realize them, it does a monthly meeting, web site, some campaigns and festivals.

"The group of the father" tries to spread out a men's movement group as the social movement group where the activeness concerns society for the solution of the gender problem beyond the limit which the men's movement in Korea in the 90s had.